

平成 23 年 5 月 23 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520219

研究課題名（和文） ヨーロッパの南太平洋像の変容と、現代太平洋文学における主体形成についての研究

研究課題名（英文） The South Pacific in European History and Subjectivity in the Modern Pacific Literature

研究代表者

山本 卓 (YAMAMOTO TAKU)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：10293325

研究成果の概要（和文）：本研究では、19 世紀の西洋人が抱いた南太平洋のイメージを、イギリス文学作品を中心に検証する一方で、現代のポリネシア地域出身の作家がそうしたイメージを作品の中で、自分たちのアイデンティティとどのように折り合いをつけているかを分析した。また、環太平洋地域に属しながらも、太平洋に植民地を持った戦前の日本における太平洋世界へのまなざしの政治的意義も、併せて検証した。

研究成果の概要（英文）：This project attempts to examine the significance of “the South Pacific” both in European imaginations and the contemporary Pacific literary works: How Europeans have generated the imaginary Pacific in their literature and how contemporary indigenous writers employ or decline those traditional ideas in creating their own identity. In order to provide another perspective, it also refers to Japanese literary representations of the region in the prewar period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：英語圏文学

科研費の分科・細目：文学 英米・英語圏文学

キーワード：英米文学、太平洋文学、ポストコロニアル批評、植民地主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は平成 17、18 年度に交付を受けた基盤研究（C）「英米文学テキストにおける南太平洋表象とそのナチュラルイゼーション」を継続し、20 世紀の太平洋文学に研究領域を広げたものである。（なお、本報告書において、南太平洋と太平洋という二つの

表現を使っているが、両方ともミクロネシア以南の地域を指す。この地域をヨーロッパから見た場合が南太平洋、この地域の居住者の視点からは太平洋となる。）

これまでは英米文学テキストにおける南太平洋の表象に焦点を当ててきた。James Cook や Bougainville たちの南太平洋の諸航海記によって、太平洋イメージの原型を探る

ことから着手し、Herman Melville や R. M. Ballantyne を通じて、R. L. Stevenson、Jack London の文学テキストに至る現地人の表象の変遷と、西洋思想における他者の位置づけとの連動、また、文学作品による既存イメージからの逸脱を考察した。例えば、Stevenson の南海小説群は、19 世紀末の欧米列強国による植民地争奪という歴史的コンテクストを背景に抱える一方で、当時の社会進化論、その影響下にある精神分析、および人類学といった思想の痕跡を示す。作者自身が伝統的な「楽園としての南海」のイメージからの脱却を図りつつも、その試みは人類を包括的に再規定しようとする世紀末の「科学的な」ディスコースに収斂される。この後に続く、Maugham や London の作品においても「観察する西洋人とその対象としての南太平洋」の力学が継承され、20 世紀中盤の『南太平洋』(1958) などのアメリカ映画や観光産業によって「楽園としての南海」というイデオロギーが再生産・強化される。こうした一連の過程をナチュラルライゼーション(概念の一般化と差異化の二重の操作)として分析した。

前回の研究は英米文学を中心に進めたが、Stevenson や Jack London に関連した資料収集のために南太平洋大学を訪れたことが、結果的に今回の研究に大きな影響を与えた。南太平洋大学はポリネシア地域の学術拠点としての機能を持っているが、その一方で文芸活動の中心地でもある。Albert Wendt、Vilsoni Hereniko、Sia Figiel といった現代の代表的な島嶼作家は、その経歴において南太平洋大学と何らかの関わりを持っていることからこの大学の影響力の大きさが伺える。

当時、オセアニア・センターの所長を務めていたのが文化人類学者の Epeli Hau'ofa で、彼は島嶼地域を代表する思想家・小説家でもある。彼の代表作 *Kisses in the Nederends* は、痔瘻の治療を求めて島中をさまようポリネシア人を諧謔的な筆致で描いているが、その荒唐無稽な物語設定とは対照的に、西洋の植民地主義と現地への影響に対して辛辣な風刺を展開する。しかしながら、太平洋の島々の現実を振り返るとき、西洋的なものを批判することは自らのアイデンティティを危険にさらす行為にもなりうる。なぜなら、太平洋島嶼国のあり方を考えるとき、西洋的なものを切り離すことは不可能だからだ。前回の研究において検証したように、彼らの歴史自体が西洋の産物であるし、植民地主義とそれに伴うキリスト教への改宗は土着の文化に多大な影響を与えた。そうした植民地が独立した現在においても、多くの島々には産業基盤がなく、西洋(この場合はニュージーランドやオーストラリアも含む)からの多大な支援によって国家体制が維持されている。

人々の社会的成功は現在でも西洋風のコンクリート建築の家によって象徴されるし、それを手に入れるためには海外での学位取得が求められる(上に挙げた Wendt や Hau'ofa もその例外ではない)。自らを取り巻く環境、また自己のアイデンティティ形成においても、西洋的なものが浸透しているのである。

歴史において長らく「語られる」対象であった太平洋の人々が、どのようにして自らを「語る」のか。すなわち、太平洋の作家たちが西洋によって作られた歴史やイメージとどのように対峙し、どのように自己の(民族の)アイデンティティを構築しようとしているのか、という考察は、これまでの研究を補完しさらに発展させるものであり、今回の研究テーマにふさわしいものと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、島嶼作家による太平洋文学を、「記述される対象としての太平洋」からの脱却の試みとして、ポストコロニアル批評の立場から読解する。具体的には、20 世紀後半の非白人が書いた文学テキストにおける主体のあり方を、西洋が強要してきた南太平洋の概念と比較・検討し、太平洋地域のテキスト群が紡ぎ出そうとする新たな太平洋像を探る。

ここでポストコロニアル批評という立場を採用するのは、この地域の文学の特徴に依拠する。ほぼ全ての島々が西洋の植民地を経験し、今なお経済面で先進国に依存している太平洋諸島の文学は、植民地主義を抜きにしては語るができない。また、人種、ジェンダー、政治、宗教、文化といったポストコロニアル批評が扱うテーマの広さも、本研究では有利に働く。植民地からの独立以降に勃興した太平洋文学の歴史はわずか半世紀足らずであるが、その歴史の短さゆえに、様々なトピックが混交した分野となっている。たとえば、Albert Wendt はサモア人男性のアイデンティティに焦点を当てた作品を数多く輩出する一方で、1967 年生まれの Sia Figiel はサモア人女性の主体を問題化する。また、Wendt と同時代人にあたる Epeli Hau'ofa はアイロニカルな筆致を得意とし、西洋からも太平洋からも距離を置いて、両者のイデオロギーに批判的なまなざしを向けるというように、多種多様な文学形態が短期間に噴出しているのである。

本研究においては、作家の伝記的側面も重要な意味を持つ。前述したように、太平洋文学テキストを分析する場合、西洋的なものを内包しそれに対峙せざるを得ない作家自身の主体のあり方も大きな問題となるからである。こうした状況は作品に色濃く投影されて

おり、作家の伝記的な事象はテキスト読解において看過できない要素である。

3. 研究の方法

本研究は資料収集を含めた現地での取材とテキスト読解という二つを軸として進めた。

まず現地への渡航であるが、ハワイ大学、オークランド大学、南太平洋大学の図書館で合計5週間以上にわたって資料収集を行った。それぞれの図書館は太平洋研究に関連した豊富な資料を蔵しており、日本国内では入手が難しい映像資料（島嶼出身の映像作家による映画や作家についてのドキュメンタリー）や現地新聞の記事（作品出版当時の書評やインタビュー）のマイクロフィルムを閲覧した。また、Albert Wendt、Larry Thomas、Vilsoni Hereniko、などの現代太平洋作家にインタビューを試み、彼らの太平洋文学についての考え方や太平洋地域の意義など「生の声」を収集した。

テキスト読解については、前回の基盤研究の研究結果を踏まえたヨーロッパ思想における太平洋像の検証をさらに進める一方で、太平洋文学作品の読解を行った。

太平洋地域の文学テキストは、Stevensonと結びつきの深いサモア出身の作家、Albert Wendt の作品から読解を進めた。その理由として、まずWendt が太平洋文学の先駆的かつ有力な作家であることが挙げられる。彼は1970年代から作品を発表し始め、今なお精力的な創作活動を行っているし、脱植民地と西欧化という歴史を目の当たりにした世代のテキストは、太平洋でのアイデンティティの構築方法を分析するには恰好の対象となる。Wendt を足がかりに彼と同世代の Epeli Hau'ofa や Larry Thomas、次世代作家にあたる Sia Figiel、Frances Koya などのテキストへと検証領域を広げることで、植民地主義に対する世代間の意識の差異や島嶼民族の主体形成の方法を確かめた。

さらに本研究の発展として、日本と太平洋の関わりにも焦点を当てた。南洋庁の職員としてパラオ周辺に滞在した中島敦は、Stevenson の書簡や伝記を元に『光と風と夢』を上梓した。作品には中島のスコットランド作家への深い興味とともに、太平洋に対する憧憬が刻印されている。Stevenson が解釈した太平洋世界を、大日本帝国の作家がどのように見つけ、どのように語ったのかを検証することは、本研究が前提とする西洋と太平洋という二項対立を別の角度から問い直すことになり、本研究の幅を広げた。

4. 研究成果

本研究の初年度は(1)歴史文献の収集と読解、(2)太平洋文学作品の読解と分析、(3)太平洋の作家とのコネクション作り、の三つを中心に行い、21年度、22年度のための研究基盤を作った。歴史文献に関しては、19世紀から20世紀にかけての旅行記、とりわけ Beatrice Grimshaw による南海文献を読み解いた。彼女のテキストは、19世紀中頃までに形成された南太平洋のイメージを、その表象方法を変えてはいるものの、本質的にはほぼそのままの形で20世紀へと移譲した点で注目に値し、特に20世紀半ばにかけて映画と観光産業が共謀した「楽園」というイメージの固定化を探るためには重要な資料となった。

太平洋文学は Albert Wendt の作品を足がかりに、太平洋文学の第一世代にあたる Epeli Hau'ofa (小説)、Sudesh Mishra (詩)、Larry Thomas (戯曲)、現代女流作家である Sia Figiel (小説、詩)、Frances Koya (詩) といった作家の作品を読み進め、太平洋文学の多様性とそこに通底するテーマを考察した。文学表象の多様性については当初予想していたよりも、バラエティに富んでいることを確認した。

3週間にわたる太平洋地域での滞在の折にフィジーで Larry Thomas や Frances Koya などの作家と接触し、彼らとのインタビューや意見交換によって、新たな作品の発掘や、主題の変遷に関する世代間の態度の差異などを発見できたことは初年度の大きな収穫だった。とりわけ、Frances Koya に代表される若い世代のヨーロッパ植民地主義についての考え方は興味深い。彼女は、植民地主義への批判的姿勢が作品に内在しているかどうかで、自分の詩が評価される傾向に異議を唱える。Koya によれば、植民地主義に対抗して個人のアイデンティティを形成するのは、もはや過去のことであり、詩が有する自由な表現の可能性を自ら限定する行為に過ぎない。確かに、彼女の詩は前世代の詩に見られるコロニアリズムへの感情を抑制し、民族や社会といった大きな問題よりは、むしろ日常的な個人の感情の表現を強調している。植民地主義の痕跡から完全に自由になっているとは言えないものの、彼女の作品は太平洋文学の新しい傾向として今後の研究においても重要な視座を提供した。

平成21年度は前年度に引き続き、太平洋文学の関係者への個別接触、関連資料の収集と分析を中心に活動した。今年度の最大の成果は、太平洋世界に大きな影響をふるう作家と親交を持てたことである。オークランドとハワイにおよそ20日間滞在し、オークラン

ドにおいては太平洋文学を代表する作家 Albert Wendt、ハワイでは劇作家・映画監督の Wilsoni Hereniko とのインタビューを行った。とりわけ Wendt へのインタビューは彼の作品の大半を網羅した内容で、太平洋文学の第一人者が自己の軌跡をどう表現し客体化しているかという点において貴重な資料となった。

研究成果の中間報告として、第 61 回日本英文学会中部支部大会（2009 年 10 月 17 日、愛知学院大学）において「太平洋文学の『語り』: Albert Wendt が描くポスト・コロニアリズムの主体の可能性」を発表した。この発表では Wendt の *Black Rainbow* (1992) を扱い、作品のナラティブ手法と太平洋世界の政治性との関連を論じた。すべての人々のアイデンティティが支配者によって植え付けられる近未来のニュージーランドにおいて、その呪縛から逃れ自分の主体を再発見しようとする主人公が抱える矛盾や、それを表象する語りの手法を、西洋が「発見した」太平洋像と現代の太平洋が西洋に向かって提示する太平洋イメージに重ね合わせることで、西洋/太平洋の二項対立を超えうる視座の可能性を検証した。

また、論文では「太平洋文学の第一世代小説家：エペリ・ハウオファとアルバート・ウェント」（『言語文化論叢』、2010）を発表した。これは、Hau'ofa の *Kisses in the Nederends* と Wendt の *Black Rainbow* がともに円環的な物語構造を採用している点に注目し、太平洋文学の第一世代の作家が共有する島嶼民族の主体形成のあり方を考察したものである。痔瘻になった主人公が受ける珍妙な伝統医療を茶化したコミカルな小説 (*Kisses*) と近未来のニュージーランドの全体政治を舞台にしたサイエンス・フィクション (*Black Rainbow*) という、一見大きく異なる二つの物語が共有する物語の円環構造が、西洋と非西洋を分断するオリエンタリズム的な二分法に対するアンチテーゼとなることを論じている。

平成 22 年度は過去 3 年間の成果のまとめとその発展を中心に研究活動を行った。

西洋における太平洋像とそれに対する抵抗という図式をより広範な見地から捉えるために、「ロボット」の概念を導入し、第 62 回日本英文学会中部支部シンポジウム『『似姿』への欲望：ロボットから読む英米文学テキスト』（2010 年 10 月 17 日、金沢大学）において、「異種混交のロボット：現代太平洋作家における主体へのまなざし」を発表した。

文学において最初にロボットを扱った Karel Capek の *R. U. R.* に頻出する master という単語に注目し、master/slave と master/copy の枠組みが太平洋小説にも援用

可能であること、さらには copy の増殖によって master/slave の境界が曖昧になり、既存の二項対立がもはや存在しない段階を太平洋文学が示唆していることを論じた。議論の締めくくりとして、Frances Koya のポストモダン色の濃い詩を紹介し、今後の太平洋文学の行方を提示した。この発表には、前年度までの Wendt や Hau'ofa の作品検証に加え、初年度の Koya とのインタビューが大きな役割を果たしている。

海外での成果発表については、第 6 回国際スティーヴンソン学会での "Locating the Pacific: Stevenson in Japanese Literature," (June 8 2010, University of Stirling) がある。この発表では中島敦の『光と風と夢』がスティーヴンソン像を構築するときに、スティーヴンソンの書簡や伝記に対して行った改編や加工に着目し、中島自身の南海に対するまなざしとそれを表象するレトリックを考察した。『光と風と夢』が描出するスティーヴンソンは過剰なまでにその孤独が強調されている。ヨーロッパから遠く離れたサモアにおいて、植民地主義に対する抗議行動のために現地の白人社会から白眼視される一方で、私生活においては年上の妻との結婚生活に疑問を抱くスティーヴンソンの姿は、彼の書簡や伝記の特定のエピソードを強調し作られた想像上の産物であり、「善良なる白人酋長」としてのスティーヴンソン像を正当化するためのレトリックの要素として浮上する。さらには、当時の大日本帝国に流布していた植民地の言説に照らし合わせるとき、中島によるスティーヴンソン像は、アジアの保護とヨーロッパ列強に対する対抗という日本の植民地支配の正当性を二重に保証しうる言説になりえたことを証明した。

「太平洋を描く：中島敦のスティーヴンソンとスティーヴンソンのサモア」（『言語文化論叢』、2011）は上記のスティーヴンソン学会での発表を下敷きに、ロマンスの舞台としての太平洋を論じた。『光と風と夢』が描くロマン化されたスティーヴンソン像を手がかりにして、スティーヴンソンの南海小説群において太平洋の現実を伝えるという作家の意図の実現がいかに困難な試みであったかを提示した。

本研究においては、ヨーロッパでの南太平洋像とそれに対する現代作家への反応をさまざまな角度から検証した。しかしながら、太平洋文学は今や島嶼文学だけではなく、ニュージーランドのマオリ文学もその範疇に入りつつある。これまではニュージーランドの文学ジャンルとして考えられてきたマオリ文学を、21 世紀以降、オセアニア地域の文学として捉え直そうという動きがあるのだ。

こうした太平洋文学の流動性を考えると、現地作家の植民地主義に対するまなざしを、今後も継続して研究を続ける必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 山本卓, 「太平洋を描く：中島敦のステイヴンソンとステイヴンソンのサモア」, 『言語文化論叢』15号, (2011), 139-157, 査読無
- ② 山本卓, 「太平洋文学の第一世代小説家：エペリ・ハウオフアとアルバート・ウェント」, 『言語文化論叢』14号 (2010), 145-163, 査読無

[学会発表] (計3件)

- ① 山本卓, 『異種混交のロボット：現代太平洋作家における主体へのまなざし』, (シンポジウム『似姿』への欲望：ロボットから読む英米文学テキスト) パネリスト, 第62回日本英文学会中部支部大会, 2010年10月17日, 金沢大学(石川県)
- ② Yamamoto. Taku, "Locating the Pacific: Stevenson in Japanese Literature," The Sixth Biennial Stevenson Conference, June 8 2010, The University of Stirling (Scotland)
- ③ 山本卓, 「太平洋文学の「語り」: Albert Wendt が描くポスト・コロニアリズム的主体の可能性」, 第61回日本英文学会中部支部大会, 2009年10月17日, 愛知学院大学(愛知県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 卓 (YAMAMOTO TAKU)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：10293325